

# 博士論文の要約

氏名 小野 光絵

論文題目 日本近現代文学に於ける〈精神の両性具有〉表象研究

本論文では、〈精神の両性具有〉表象という切り口から日本近現代文学のテキストを論じた。これは、ジェンダー（文化や社会通念上の性別、ないしは意識の上で自認する性別）における両性具有を意味するアンドロギュヌス（androgynous）の表象を論じるものであるが、中でも、内面の両性具有性の表象がみられるテキストを研究対象とする上で、便宜上「〈精神の両性具有〉表象」という表現を用いた。

具体的には、倉橋由美子（一九三五―二〇〇五）・尾崎翠（一八九六―一九七一）・中井英夫（一九二二―一九九三）・今村夏子（一九八〇～）の四人のテキストを採り上げ、語りによって表象される内面の両性具有性に焦点を当てた。

現時点において、近現代あるいは他の時代の日本文学における両性具有表象を概観できるまとまった先行研究はみられない。その上で、本論文であえて〈精神の両性具有〉表象に的を絞ったのは、男性／女性という性の二分法からこぼれ落ちる心の側面に光を当てることを企図してのことである。これを論じるにあたっては、主に、語り手や視点人物の内なる異性のイメージの表象に着目し、それを〈内なる異性像〉というキーワードで捉えた（語り手や視点人物の性に応じて適宜〈内なる男性像〉などとも言い換えるものとした）。

第一章では、日本近現代文学における両性具有表象を扱う先行・関連研究について、とりわけ内面の両性具有性への着目がなされているものを中心に概観した。従来の研究において、内面における両性具有性の表象に特化したテキスト、つまり語り手や視点人物が外見上は両性具有の体現者ではないものの、その内面の両性具有性に焦点が当たるテキストが見落とされている点を指摘した。また、ここで採り上げた加藤幹也のエッセイにおける、アンドロギュヌスを単独にして完全であるという理想の象徴として理解するという視点を、第二章以降でテキスト分析を行う上での重要な着眼点として継承した。

第二章では、とりわけ「アンドロギュヌス」というキーワードが直接登場するとともに、〈内なる異性像〉が極めて明確に表象される倉橋由美子の『結婚』（一九六五年）を、当時の時代状況を踏まえ分析した。女性作家Lの視点を通じて語られる、結婚相手のS、そしてL自身の〈内なる男性像〉としてのKとの関係に着目し、KはLが女性として生きる上でこぼれ落ちてしまう「もう一つの部分」に他ならず、倉橋テキストに登場する〈精神の両性具有〉を示すそうした女性作家たちは、当時のジェンダー規範（小説を書くことがほとんど男性特有の才能と見做された時代状況）を侵犯し突き破る存在であると結論づけた。

またこの章では、観念的・抽象的な作風であるとして批判的に言及されてきた側面のある倉橋のテキストの特徴について、むしろそれこそが〈精神の両性具有〉が表象される上で不可欠な抽象度であると指摘した。その上で、『結婚』で語られるLの〈内なる男性像〉は単に観念上の存在であることを超え、Lの感性や身体の状態とも強固に結びつき響き合う、いわば身体化された存在であることを論じた。

第三章では、KとLと名指される男女が共に登場する一九六〇年代の倉橋の小説十八本をテキスト横断的に分析することを試みた。KとLはテキストごとに舞台や細かな人物設定等が異なっており、双子であるほか、恋人や婚約者、生徒と家庭教師の関係、そして小説家Lと、彼女の思い描く〈内なる男性像〉としての架空の双子の兄Kなど、様々な関係性を取って登場する。少しずつ角度を変えて変奏されるこれら一連のテキストは、男と女という性の二分法を絶えず擦り抜け、あるいは組み替えていく試みであることを論じた。

特に双子としてのKとLの登場が（架空の双子であるものも含め）八本のテキストに渡って繰り返していることの意義については、次の点を指摘した。双子表象を通じて、男女のKとLが自他の関係として語られると同時に、一人の人間の内面の多重性としても語られている。テキスト間の設定のゆらぎを通じ、男と女という性の二分法のみならず、登場人物の自他の境界線をも揺さぶり、自己の内面の創造性の豊穡さという魅力と、自己と対をなす特別な他の存在というイメージの持つ魅力との間を行き来する試みでもあったと結論づけた。

第四章は倉橋に先行する女性作家尾崎翠の『木犀』（一九二九年）におけるチャップリン表象を探る論である。〈内なる男性像〉に通底する「チャアライ」の影のイメージを分析し、表現者としてことばを模索する「私」が、N氏という生身の男性（「私」に求婚し拒まれた人物）よりも、記憶の中の「N氏の影」に心惹かれている旨を明らかにした。また、「私」が映画「ゴールドラツシュ」の登場人物としての「チャアライ」と幻想上の会話を交わす場面について、ここに表象されるイメージは、映画のチャップリンのイメージを借用・変形することによって表現された「私」の分身であり、「私」の〈内なる男性像〉の具現化であると、後続の尾崎翠テキストとのテーマの連続性に言及しつつ結論づけた。

第五章は中井英夫の『光のアダム』（一九七六—一九七七年）を採り上げた。このテキストは先行研究において、天界に属する両性具有の天使をありありと語ることに徹するよりも、地上に取り残された「俗物」について語ることへと着地した結末への批判がなされていた。しかし、テキスト中に示された同時代資料を踏まえた上でのテキスト分析を通じ、示村という視点人物に、彼方へと去っていく不比等という青年との隠れた分身関係を見いだせることを指摘した。そして、『光のアダム』とは示村の中に潜在する〈精神の両性具有〉を暗示したテキストであると位置づけた。

第六章は今村夏子の『こちらあみ子』（二〇一〇年）を論じた。あみ子の恋が、「のり君」という生身の少年に向かっていくようでありながら、「赤い部屋」（書道教室）を覗き見た際の、あみ子に「熱視線」を向けるのり君という幻想や、のり君の書く文字の魅力への強い関心へとずらされている点に着目した。そして、中学校卒業直前までのどこかの時点で、それが幻想であることにあみ子が気付きつつも、あえてその幻想を生きていた可能性をテキストに即して指摘した。そしてそれは、あみ子が苦難を受けながらも自身の創造性を発揮して生きることを模索する上でのイマジネーションの活用であったと結論づけた。

また、幻想としてののり君をあみ子の〈内なる男性像〉と位置づける上で、このテキストの中であみ子は〈女らしさ〉などのジェンダー規範の押しつけを受けていない点に着目した。そして、〈精神の両性具有〉というテーマを、男性／女性というジェンダーの二分法からこぼれ落ちていく心の側面の問題から、〈生身の人間として生きる上で自分自身の中からこぼれ落ちていく理想〉という一層普遍的な問題へと組み換える発想を提示した。